

特別支援学校での音楽療法にみられるインタラクション

児童生徒との相互的コミュニケーションを成立させる教師等の態度の分析

高野 美由紀¹・有働 眞理子²

(¹ 兵庫教育大学特別支援教育専攻・² 兵庫教育大学言語系教育分野)

問題と目的

知的障害などの障害がある子どもに対して音楽療法を用いて働きかけることも多い。音楽療法により子どもたちに満足感や達成感を提供することができ、人とのコミュニケーションを円滑化するなど、障害がある子どもに対する音楽療法の様々な効果が知られている。特別支援学校の中には、音楽療法士を非常勤講師として配置し、障害の多様化に対応した指導を充実させ、教師の専門性をより一層高め、指導体制の充実とその活性化を図ろうとしているところもある。そのような学校では、音楽療法士が児童生徒に対して音楽療法の集団セッションを行い、音楽療法士が主担当、複数教師が補助となるチーム・ティーチングの形態をとる場合もある。我々は、このような日常生活の場である学校で、他の専門家と教師がチームで働きかける環境は、教師の専門性向上のみならず、児童生徒にとっても相互的コミュニケーションを手掛かりに活動、参加を促進するために重要と考えている。

一方、障害の重度化・重複化の傾向が進み、重度重複障害のある子どもが増加し、またインクルーシブ教育体制の整備が進展している現在、重度重複障害があり、やり取りの難しい子どもとの相互的コミュニケーションを成立させる方略および成立することの教育上の効果、発達上の意義を明らかにすることが重要である。

本研究では、表に示す ICF（国際生活機能分類）の枠組みを用いて、音楽療法士と複数の教師（教師等）がかかわるチーム・ティーチングでの教師等の態度を、児童生徒のコミュニケーションや対人関係を促し、授業への参加を促進する発達支援における重要な環境要因ととらえ、支援者である教師等の態度を明らかにすることを目的とする。

今回の発表では、特別支援学校で行われている音楽療法の観察をもとに、音楽療法士と児童生徒、教師らのインタラクションを分析し、児童生徒の相互的コミュニケーションが成立し、活動の広がりや授業への参加を促進につながるインタラクションについて記述をする。その記述を通して、これらインタラクションから発達支援を行う上で適切な支援者（教師等）の態度を概念化していく。

対象および方法

特別支援学校の授業で行われる重複障害児に対する音楽療法に参加する音楽療法士および教師を対象とした。著者二人が、授業観察をしながら撮影したビデオ記録をもとに、音楽療法士および教師発話を書き起こしトランスクリプションを作成し、教師等からの働きかけへの児童の反応に対して教師等が応答するなど相互的なコミュニケーションが成立しているエピソードを取り出した。得られたエピソードについてビデオおよびトランスクリプションを繰り返し見て、相互的コミュニケーションを成立させる方略を考える上で重要と思われるエピソードを取り上げた。さらに、会話分析的手法を用い、また複数のビデオを用いてマルチモーダルに記述することが可能なアノテーションソフト ELAN や音声分析ソフト SUGI analyzer などによる記述なども必要時に加えて分析した。

結果および考察

呼名に対する応答として生徒がハイタッチであいさつの反応を示す、生徒が音楽に合わせ身体をゆらすのを見て教材とゆれに関連付けた新たな曲に変えて教室全体でイメージを共有する、活動から逸脱して別の教材を触っている様子からその教材を用いた活動に発展させるなどのエピソードを取り上げた。教師等は、児童生徒の様子から興味が持てる活動を探り、即興的に取り込んでいた。教師等同士が雑談も交えながら活動に見られる児童生徒の様子について笑顔で話し、教師等は児童生徒に表情豊かに、リズムカルにことばをかけていた。さらに詳細に記述し、分析結果をもとに考察していく。

なお、本研究は科学研究費（課題番号 23520462 および 24531245）の支援を受けて行われた。

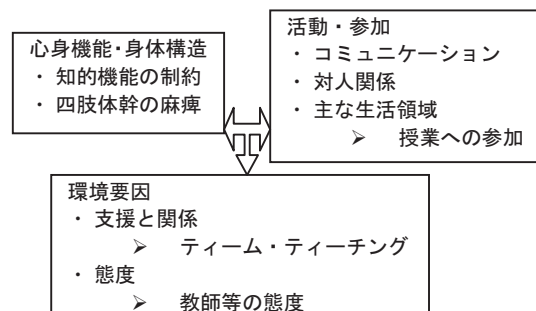


表. 知的障害等ある子どもへの発達支援の枠組み